第9回みんゆう新聞感想文コンクール作品紹介

生きた教材で表現力養う

「第9回みんゆう新聞感想文コンクール」の表彰式が10日、福島市の福島民友新聞社で行われる。受賞するのは小学3・4年生の部から高校生の部までの4部門でそれぞれ最優秀賞1点、優秀賞3点、入選5点の入賞作品と学校賞3校。最優秀賞、優秀賞の受賞作品を紙上で紹介する。【審査結果は11月7日付、1、5面に掲載しました】

コンクールは、児童、生徒の広い視野と豊かな心を育む生きた教材として新聞を活用し、確かな表現力を身に付けてもらうため福島民友新聞社が実施している。

「新聞記事を読んでの感想」をテーマに、福島民友をはじめ日刊紙の一般記事や社説、コラム、連載企画、こども新聞などを読んで感動したこと、興味を持ったことについて作品を募集。県内87校から1365点が寄せられた。

審査では、福島地区中学校教育研究会の西牧伸弘国語部長（福島市・岳陽中校長）を審査長に、審査員が厳正に入賞作品を選んだ。

審査員次の通り。

審査長＝西牧伸弘（岳陽中校長）▽副審査長＝松野光伸（瀬上小校長）▽審査員＝梅野克也（県教育庁高校教育課指導主事）佐藤尚美（北信中教諭）橋本武志（立子山中教諭）斎藤美佳（松陽中教諭）菊田文彦（梁川中教諭）上石健一（二本松一中教諭）本田恵一（二本松二中教諭）渋谷朋子（野田小教諭）柴田達八（伊達東小教頭）梁谷良子（大山小教諭）高橋正人（福島大教職大学院特任教授）大和田修（県高校PTA連合会事務局長）小野広司（福島民友新聞社編集局長）

各部門の入賞者（敬称略）

【小学3・4年生の部】
◆最優秀賞
大橋明莉（柏城4年）
◆優秀賞
小野楓華（小金井4年）
佐藤敬斗（杉田3年）
目黒大翔（日新4年）
◆入選
市川美鈴（南向台4年）
上高理子（小金井4年）
小林桃佳（柏城3年）
矢吹美緒里
（桜の聖母学院4年）
渡辺湊（大島3年）

【小学5・6年生の部】
◆最優秀賞
大塚優（柏城6年）
◆優秀賞
小林未来（玉川一6年）
桜井亮人（大島5年）
藁谷琢也（湯本一6年）
◆入選
江井あかり（鶴城5年）
大竹唯斗（玉川一6年）
亀山ひかり（大島6年）
鴫原月那（福島大付5年）
星一夢（小金井6年）

【中学生の部】
◆最優秀賞
渡辺和泉（二本松一1年）
◆優秀賞
小賀坂百合（信陵2年）
桜井喬仁（郡山五3年）
鈴木ゆわ（中央台南1年）
◆入選
小松美月（中央台南3年）
坂本絢音（中央台北3年）
白坂聡一朗（北信3年）
鈴木真優（須賀川三3年）
星歩（中央台南2年）

【高校生の部】
◆最優秀賞
渡辺弥生（福島1年）
◆優秀賞
金沢瑛歩（学法石川2年）
佐藤令（福島西3年）
鈴木麻由（安積2年）
◆入選
高橋由輝（学法石川2年）
竹内綾花（小野3年）
鈴木優花（学法石川2年）
二瓶翔馬（福島明成1年）
渡部莉央（喜多方桐桜3年）

【学校賞】
玉川一小（玉川村）
中央台南中（いわき市）
学法石川高（石川町）

審査長講評

本年度は小・中・高合わせて1365点と昨年より200点以上も多くの作品が寄せられました。本コンクールは「教育に新聞を」の、いわゆるNIEを推進することを目的にしていますが、今回で9回目を数え、定着し、その任を担い続けられていることに敬意を表します。

全体的に見ますと、さまざまな記事に着目し、自己の経験や調べたことを基に考えを持ち、自分の生き方や世の中の在り方を見つめ直し、提案を発信しようとするなど、レベルの高まりが感じられました。

福島地区中学校教育研究会国語部長
西牧　伸弘さん
（福島市立岳陽中学校長）

成長感じ頼もしさも

小学3・4年生の部門では、自分が興味のあることについて、新聞記事をきっかけとして家族と一緒に追究したもののほか、ゲーム障害や犬猫保護など、自分の身近にある社会問題に目を向けたものなど、小学生らしい作品が多く見られました。

小学5・6年生の部門では、環境や命、健康など、記事のテーマの幅が広がるとともに、記事の種類もコラムに目を向けた作品もあり、高学年にふさわしい成長が感じられました。

中学生の部門では、実に幅の広いジャンルに目が向けられ、興味・関心の多様性を実感できました。関連する複数の記事を比較するなど、客観的な視点で事象を捉え、その上で自分の意見を論じたり、提案したりする作品が見られたことに、好感が持てました。

高校生の部は、出点数が飛躍的に伸びました。性差別や性的少数者（LGBT）の問題から地域振興まで、記事の選択の必然性が、今の自分との関係で明確であり、主張もしっかりして、説得力がある作品が多くありました。また、社説やシリーズ特集などに目を向け、自分の人生観を深めた作品もあり、新聞の持つ価値を再認識させられたことに、さすがは高校生と頼もしさを感じました。

課題としては、誤字・脱字に注意して丁寧な文字で表記すること、テーマや視点を明確にし、一貫性のある内容にすることなどが挙げられました。

新聞を読むことで、さまざまな事象に触れ、考えを深めることは、今後ますます大切になります。このコンクールがさらに充実し、児童、生徒の資質の向上に役立つことを期待いたします。

4部門の最優秀賞

小学3・4年生の部

「世界プラごみ年間3億トン超」

柏城小4年　大橋（おおはし）　明莉（あかり）さん

私は、記事の海の写真が、海水が見えないほどゴミでいっぱいだったことに、おどろきました。そして、そのゴミが3億トンもあって、1兆円もの大金がむだになることにも、おどろきました。

プラスチックゴミは、土にもどらないので、うめ立ててもかんきょうにたまることや、海に流れたゴミを魚が食べて、その魚を人が食べると人の体にも悪いので、ゴミはぜっ対にへらした方がいいと思います。

1980年ごろは、まだゴミの量も少なかったので、お父さんの子どものころの生活を聞いてみると、小さなペットボトルの飲み物は売っていなかったことや、今のように使いすてのストローやトレーを身近に使うことはほとんどなかったことが分かりました。今は、かんたんに使えるべんりな物がふえて、みんなで使うようになったので、プラスチックゴミがふえてしまったのだと思いました。このままべんりだからと使いすてばかりしていたら、かんきょうにも人の体にも悪いことばかりになってしまうと思います。

そこで、みんなでプラスチックゴミをへらす方法を考えてみました。一つ目は、学校でみんなでつたえ合って一人一人がいしきすること、二つ目は、トレーやストローを必要がないのに使ったり、たくさん買ったりしないこと、三つ目は、一カ月に買うトレーやペットボトルの飲み物の数を決めること、四つ目は、水とうを持ち歩いたり、トレーのおべん当ではなく、自分で作ったおべん当を持って行くなど工夫をすることが大切だと思いました。

これから、みんなで努力して、ゴミをへらしていきたいと思います。

小学5・6年生の部

「『最古級の地図発見』の記事を読んで」

柏城小6年　大塚（おおつか）　優（ゆう）さん

「これってすごくない!?」『最古級の地図発見』この見出しを見た時、歴史好きの私は、急に心の中がドキドキとワクワクでいっぱいになった。

その記事は、広島県の収集家が、全体が残っているものとしては最古の日本地図を発見し、博物館に寄託したというもの。「日本扶桑国之図」と呼ばれ、京都を中心に六十八の旧国が丸みを帯びた形で描かれている。

この地図の写真を見て、意外と今の地図とそれほど変わっていないという事にとてもおどろいた。地域が大まかに丸でそれぞれ区切られているため、一見分かりづらいが、よく見るとけっこう特徴をとらえていて、「ここが関東だな」というようにだんだん読み取れてきた。今の地図を簡単にした感じで、予想外に分かりやすくて感心した。地図で有名な伊能忠敬は江戸後期の人のため、それよりずっと昔の室町時代に、まるで空から見て描いたようなすばらしい地図があったとはとても不思議な気持ちになった。分かれば分かるほどなぞが増えてくる。やっぱり、歴史っておもしろいと改めて感じた。

また、私は日本には六十八も国があった事にもおどろいた。今より二十以上も多いため、覚えるのは大変だっただろうなと、私が今の時代に生まれて良かったとほっとした。急にどこどこに戦さに行くよと言われてもぱっと思い出せない事が、武士の人達にもあったのではないかと想像すると笑えてきてしまい、なんだか親近感がわいてきた。なぜなら、何をかくそう、私は大の方向音痴だからだ。カーナビやグーグルマップがある今の世の中は、便利ですばらしいなと思い、これらのありがたみを改めて感じた。

高校生の部

「自分の色を」

福島高1年　渡辺（わたなべ）　弥生（やよい）さん

ある日開いた新聞の「染織家　志村ふくみ」という見出しに目が引きつけられた。以前何度か目にしたことのあるお名前が気になって、「人生の贈りもの」と題されたその連載を追いかけることにした。

志村ふくみさん。染織家、随筆家であり、「人間国宝」でもある方だ。その歩みをたどりながら、心に残ったことがいくつもある。

例えば、一本芯の通った、彼女のぶれない生き方。染織の道を志した頃、「生半可な決心でやっていける仕事ではない」と先輩の芸術家に厳しく諭されても、諦めることなく仕事に打ち込んだ姿。「命がけだよ」と言われて怖気づくことなく、逆に「心が燃えた」そうだ。織物に専念するために、一時期、娘さんと離れる道を選んだことにも驚いた。大切な何かと引き換えにしても決めた道を突き詰める信念。一体何が彼女をそこまで強くしたのだろう。果たして私にそんなものがあるだろうか。志村さんの生き方を見ていると、自分が問いかけられているようだった。

まっすぐに生きる志村さんを支えてくれる人が幾人もいたことも心に残る。生活を切り詰めて購入資金を作り、毎年最上の作品を買い続けてくれたマリアさん。作品に豊かさが出るよう助言をくれた、富本憲吉さんや今泉篤男さん。随筆家としての一歩を踏み出すきっかけをくれた大岡信さん。自分の道を継いでくれた長女、洋子さん。良き友となり、未来に向けて語り合った石牟礼道子さん…。多くの人が彼女の人生に影響を与え、様々な「色」をもたらしてきた。それもひとえに、志村さんが自らの決めた道を貫き、ひたむきに努力し続けてきたからこそだと思う。

今回改めて気付いたことがある。それは、「智恵の引き出し」という新聞の存在意義だ。私はこれまで、新聞を主に「ニュースを得る手段」として捉えていた。しかしこの連載のように、誰かの言葉や生き方などを伝え、触れる人に何かをはっと気づかせてくれることもあるのだ。最新のすぐに役立つ情報ばかりでなく、生涯の道標となるような情報にも気軽に触れ得るのが、新聞の魅力なのだろう。

この夏志村さんの記事に出会い、決めた道を挫けず邁進する志村さんの色に、私も少し染められた気がする。志村さんはそのひたむきな仕事と生き方で、多くの人の生活に彩りを与え、様々な色をもたらしてきたのだろう。

今の私は、まだ何色ともいえない状態だ。自分の努力次第で、きっと何色にも染められるはずだ。今は多くの夢があり、どのように生きていくべきか定まっていない。未来がどうなるのかも分からない。でも、誰かを支え、支えてもらえるような人に、様々な色を生み出し、吸収できる人になりたい。大切なことを教えてくれた志村さんに、そう誓った。

中学生の部

「私の『好き』の向こう側」

二本松一中1年　渡辺（わたなべ）　和泉（いずみ）さん

私は、服が好きだ。お店に行って選ぶのも、工夫をして着るのも、どちらも楽しい。でも、私は「作る人」や「売る人」、他の「買う人」のこと、そして選ばれなかった服の行方を考えていなかった。そのことに気づいたのは、新聞で、ある記事を読んだからだ。

「捨てられる新品の服『年10億点』」という衝撃的な見出しとともに載せてある写真には、大きな倉庫を埋め尽くす段ボール箱が写っていた。文章を読んでいくと、その箱の中身は全て「新品」の服だった。そして、一部は再販売されるが、多くはそのまま捨てられてしまうと書かれていた。私は驚き、もったいないと思った。いったいどうして捨てられてしまうのだろうと考え、関連する記事を探してみた。すると、私達消費者の変化が、この状況を作り出していることが分かってきた。

例えば、「流行を追いかけ、より安く」買おうとする消費者のために、製造コストを抑えようとして大量に作った服が売れ残ってしまうそうだ。必要以上に作りすぎてしまっている、ということなのだろう。また、古着をインターネットで気軽に売り買いすることができるようになり、その分品が売れなくなっているということもあるらしい。これは、物を大事にするという面から見れば、いいことなのだと思う。しかし、新品の服の立場になって考えると、一度も誰にも必要とされずにただ捨てられたり燃やされたりするのは、服にとっても、それを作った人にとっても、悲しいことのような気がした。

このことは、よく耳にする「食品ロス」と同様の問題だと思う。学校の家庭科室の前に掲示してある新聞記事には、食品ロスの解決策として「フードバンク」が紹介されていた。まだ食べられるのに様々な理由で処分されてしまう食品を、食べ物に困っている施設や人に届ける社会福祉活動のことだ。

私は、このフードバンクと同じように、服もそれを必要としている人の所に届けられないだろうかと考えた。衣・食・住は、人には欠かせないものだと思うからだ。ただ、問題は簡単ではなさそうだ。ある有名ブランドの売れ残り商品は全て破砕して焼却するらしい。最初はびっくりしたことをするなあと思った。でも、高い値段で買ってくれた人がいるのに、それと同じ物が安売りされたり無料で配られたりしていたら、経営を維持するのが難しいということも分かる。やはり「服バンク」のような仕組みを創るには多くの知恵が必要だろう。

可愛くて安い服の向こうには低賃金で長時間働く外国の労働者がいる。大量の無駄がある。そのことを忘れず、何かを「やってみよう」と思える自分でいたい。今の私にできることには限りがあるけれど、まず、服や食べ物を大切にすることから始めてみようと思う。